

直島への手紙 第七信

前略 大岸 様

10 月も下旬になり、めっきり秋らしくなってきましたね。朝晩も涼しくなってきましたが体調を崩したりしていませんかでしょう。

さて、先日のお手紙では、小規模な島での米作りや畑作の可能性についてお書きました。農地の存在は、絵図から江戸時代までさかのぼることはできますが、それ以前のことはなかなかわかりません。そこで注目したいのは、島に残る遺跡でみつかった土器です。例えば、家島の西側の砂浜には複数の時代の土器を確認することができます。同じようにいくつかの島で、同じ場所(範囲)から複数の時代の土器が見つっています。このことから、人々が何度か暮らしたことが分かります。もちろん、その暮らしは、短期間かもしれませんが、別の島に住まいを構えつつ、塩づくり、漁業、農業などの目的で一時的に移動している可能性や、一年の一定期間だけ住んでいる可能性などいろいろなケースが考えられます。

それでも、同じ場所に何度も暮らしているということには意味があるのではないのでしょうか。フィールドワークをしてみると、船が接岸しやすい場所ということだけでなく、砂浜の背後の少し高くなった所に平坦な場所があります。実際に、喜兵衛島の発掘調査ではそういった場所で竪穴住居が確認されています。

明治時代以降のことにはなりますが、小規模島での暮らしをイメージする際に、家島の例が参考になります。以前に家島にお住まいだった方からお聞きしたことや、現地でのフィールドワークをもとに描いたものが下のイメージ図です。家島は明治4年に塩づくりが開始されます。港の奥の南北の丘陵の間の少し高くなった場所の平坦地や、入江の北西部の塩田よりわずかに高い丘陵の裾(斜面を背)に住まいが設けられています。住まいはコンクリートブロック塀で区画した中に複数の建物があり、離れの風呂や納屋などもありました。水の確保は井戸に頼って

いましたが、塩分を含む場合もあったとのこと。いずれにしても海に面した少し高くなった場所に住まいを築いていることが分かります。こうした場所が確保できるところが何度も住む場所として選ばれているようです。当然、水の確保、風雨の影響なども勘案されていたと思います。

住まいの周辺では、丘陵の緩斜面、塩田の北西側の平坦部に畑をつくって、野菜、果樹が栽培され、その一部は販売(漬物など)されていました。スイカは好評だったようです。畑の奥にはため池もあったようですが、家島には水田がなかったため、米は船で売りにきていたとのこと。タコ、ハゼ、ウナギ、タイなどの漁、真珠の養殖の仕事の手伝いをする人もいて、塩田以外にも多様な仕事をしていたようです。このほか、住まいと住まいの間の斜面には塩神様が祀られ、南西部の丘陵の斜面には墓地もあります。

このように家島では、明治時代に防潮堤を築き、塩田を造成して大規模に塩づくりをはじめましたが、多様な生業があったことが分かります。それでも、100 年ほどしか島での暮らしはつづきませんでした。現在は、無人島になっていることを考えると、時代を問わず、島での暮らしは、移ろいやすいことも分かります。家島の事例からも、いくつかの時代の遺物がある場所(遺跡)には、島で暮らす上で必要な環境が一定程度あることが分かります。一方で、自然環境や社会環境の変化によって、暮らしが途絶えてしまうこともあります。それでも、何度も同じ場所で暮らしを営んできたということは、住む上で必要な条件が整っている場所を先人たちから学んでいたのではないのでしょうか。同時に、そこにある環境を変えるために試行錯誤を繰り返しながら、新たな知恵を創造してきたのではないのでしょうか。

まだまだ直島群島の暮らしについて調べてみたいと思いますので、お手紙書かせていただきますね。

早々

四国村落遺跡研究会 渡邊 誠 拝



家島のイメージ図